

十四
 督を繼ぎ信就は徳川の旗下となつて二千石を領す是れか通が爲には孫
 也とやそれはさてお通は博學秀才比類なく殊に容色嬌態勝れて絶倫
 なりしかば最初織田公信長に仕へ又豊臣の側室淀殿或は北の政所にも
 宮仕せしとぞ又後水尾帝の皇后東福門院に奉事せしとも云ふ左れば淨
 るり十二段は何れに奉仕せしとさの著作なるか明示し難けれども予か
 取調たる結果としては正に信長に勤仕せしときにて三河の國矢矧の長
 者の乙の姫淨るり御前源の御曹子牛若子に懸想の委細を姫は峯の薬師
 の告子なれば薬師の十二神將に象どり十二段に作述せしに相違なしと
 斷定したり殊にお通書を狩野光信の風を習得し豫て天神の象を畫く尤
 彩色に妙を極めたれど花鳥を畫きたる少しとや書はお家流の能書に
 して其頃女流の冠たりしや疑なし否疑なき而已ならず其文法の秀麗な
 る畫繪の妙絶今の世にも得難き堪能の才女也説の當否事の起因は措て
 問はず淨瑠理開祖と尊崇して萬々差支なしと予は有がたく信仰致候ぞ

かし、扱是より出鱈目に簡單に一括して略傳を連載せんに全体本章は別
 段の必用述はなきものあれど須らく淨瑠理を好む者豫め了知し置くべ
 き因縁あれば起章たるものに付き一く洩さすあまらずと云ふ譯に
 はあらず只名人中の名人を躍扱したる物なれば其積りにて、瀏覽あらま
 はしけれ

第二章 名人略傳

○角澤檢校 和泉國堺の津の盲人也、小通が淨瑠理長生殿十二段を三味
 線に彈初む是れ石村檢校琉球より習得したる蛇皮線を三味線として
 其弟子虎澤檢校山野檢校淺利檢校伊豆檢校岩崎檢校佐山檢校河村檢
 校市川檢校杯夫々相傳へて時々新曲を發明せる内角澤檢校嶄然一頭
 角をなして先ッ第一着として小通が十二段に人の老少天象地形恰も
 活動して其物を見るが如く接するが如き感情を僅るに三箇の細絃に
 聲曲を配當せる事の發明中の最も業前の勝れし名人ありしや疑なし

左れば社々淨瑠璃三味線開祖と尊拜するに寔に然るべき事と思はる
 ○近松門左衛門 元と長門の國萩の人にて世々毛利の家臣也姓は杉森
 氏名は信盛と云ふ平安堂と稱し又巢林子不移山の號あり幼なき時肥
 前の國唐津の近松寺に入つて髪を削り古潤と號す博覽にして諸書に
 通じ才識群に超ゆ師住持せしむと雖ども古潤謂へらく一寺の主は凡
 俗に等し豈衆生を濟度せんに焉ぞ圓頂黒衣に限らんと京師に出て其
 弟岡本一抱に依而蓄髪し出て一條家に仕へ從六位に叙せられ益々博
 朝典を極め古學を修む既にして事を辭して市裡に栖み名を近松禪
 寺に象り近松門左衛門と改め稗史小説を以て凡俗を間然教化誘導す
 るの結構に依つて縦横に筆を採るや名聲愈々高きを加へ新文法愈々
 世人の注意をひき稀代の名作者となる是によつて歌舞伎座萬太夫宇
 治加賀太夫井上播磨縁等の爲めに淨瑠璃を作り元祿三年浪花に移り
 竹本筑後縁の爲めに淨るり數十種を作る文章の勝絶巧緻なる人偶と

配するも恰も活動するが如き觀あり惜しい哉享保九年十一月廿二日
 浪花に没す年七十二辭世あり

それ辭世去程にさても其後に殘る櫻の花玄にははじ

○表具屋又四郎 は大阪の人岡本文彌の門人なり貞享元祿の間表具屋
 六しを發明す世に表具屋節又四郎節とて持離すは是なり

○竹田出雲 が祖は阿波の産にて出雲の父清一に至つて江戸に住す出
 雲は江戸にて産る近松に次ぐ淨瑠璃作者の名人にして清定千前軒と
 号せり如何にもして一家を興玄子孫の隆盛を計らんと或日淺草觀世
 音た參詣せしに其歸るさ大勢小供のよつて砂遊びそるを見て大に發
 明し種々工風の末一種の砂時計を製作し是より次第に家運の發達を
 來しけるが其後清一は機械人形を發明してはる／＼都に上り由縁を
 求めて是を九重の上に奉りければ万治元年出雲縁を受領してけり去
 る程に浪花の地に下りからくり芝居を創設して寛文二年竹田座の元

祖となりて、後享保十一年五月六日近江の椽と改めけるが、全十四年病を以て歿すと云

○二代目竹田出雲 是は初代の長子にて家名を相續し二代目近江の椽とある名は清英通稱三四郎と稱しけるが性來虛弱なれば自分近江の椽となりて弟清定に出雲の号と共に竹田座を譲り、悠々自適の間月日を送りけるが寛保二年病没すと云ふ

○三代目竹田出雲 是は名人にて寶永二年三月兄より出雲椽を譲られ始めて、享保八年大塔宮職の鑑を松田和吉と相談して著す、非常の好評なりしと云ふ、幼より才智衆に勝奇童の名ありし事、空しからず、叔社一世の名人にて傑作數種あり、實に近松が文法の神髓を奪ひし迄もなく、趣向の妙を極めたる欣仰措く能はざる名人なり、寶曆七年十月二十一日を以て終る其辭世也

影涼し水に彌勒の腹ふくる

○竹澤權右衛門 は大坂開祖と稱する井上播磨の椽の門人にて、元と尾崎權右衛門と云ひしが、貞享二年竹本義太夫なる清水理太夫と共に、竹屋庄兵衛と義を結び角澤の澤の字を取り、竹澤と改め三絃の惣元祖となる

○竹本筑後少椽 是は當流の元祖とせる竹本義太夫が事にて、元と攝州天王寺村堀越町の農夫にて五郎兵衛と云ひしが、清水理兵衛の門人となりて晝夜の別なく丹誠を抽で肝膽を碎きて、修行せし程に技漸く進みて清水理太夫と稱し京都四條河原に於て宇治嘉太夫の流と播磨流と折中し、遂に一流を案出して謠ふ世舉りて賞讃す是に於て竹本義太夫と改め、貞享二年始めて道頓堀に操芝居を興行す、目下の辨天座是元祿十四年宣示を受けて竹本筑後少椽と改む時に近松門左衛門あり、狂者作者として名聲都鄙に轟きしうば、筑後常に其作を謠ひ名愈世上顯はる寶永元年座元を引き、全二年竹田出雲に襲がしむ正徳四年病

傳 秘 瑠 璃 海

て歿す年六十四、天王寺念佛堂前に葬る。嘗て義太夫宇治嘉太夫と全座にて語りしに、天質美聲、嘉太夫が人氣を凌ぎしかば、自然不和となりしに、嘉太夫の銀主竹屋庄兵衛、義太夫を誘ひ、藝州宮島へ下り興行せし内、一日嚴島明神に參詣し、藝道發達をさしめ給へど、一心不乱祈りけるに、明神感納まし、くけんふと睡みし暫しの夢に、天童一巻の軸を持出て授くると見て、夢覺めたり。是より次第又上達を重ね、遂に天下に比類なき名人と稱せられ、元祿十四年己五月、筑後の椽を受領し、藤原博教と名乗る。死しての法名、道喜居士と云ふ。

○竹本播磨少椽 筑後の椽の門人にて、本姓紅屋長四郎と云ふ。粗ば其奥儀を極むと雖も、未だ操座に出る事叶はざるを憾、一日師に願ふと雖も、其伎倆なしと許されざりしかば、去つて京師に至り、兄弟子若太夫、後豊竹、豊後椽に就て芝居を興行して、藝稱を若竹政太夫と改む。適々筑後劇場に至り、其語るを聞て、大いに感歎し、業を傳へんもの、彼より外にありし。

傳 秘 瑠 璃 海

傳 秘 瑠 璃 海

と急ぎ呼還して、芝居に出動せしめ、正徳四年其臨終に、名籍を襲がしむ。扱享保十九年、遺言に依つて二代義太夫と改め、元文二年又改めて播磨の少椽となる。後人淨瑠璃中興の祖とす。語る處九十三番あり、延享元年病て歿す。年五十四。天王寺領國恩寺に葬る。別に碑を天王寺の西門傍に立つ。其側らに腹帶を埋めて、曲帶塚と云ふ。伏見中書島に扇塚あり。播廣用ひし扇を埋むと云ふ。法名、不聞院乾外狐雲居士と云ふ。

○並木宗輔 西澤一鳳の門下にて、享保の頃より、次第に名聲高く振ふ。其頃浪花に竹本豊竹の二座あり、一曲出る毎に市中の喝采を博し、時に宗輔、豊竹座にあり、謂へらく一人の智は限り、衆智を蒐め、衆力を藉る。又如のすど、乃ち全儕と計り、一篇を別ちてめい、一章を作り合せて大成をなと覽るもの、非常に感動すと云ふ。尚作者に並木杵屋とあるは、皆此門葉也。

○虎屋薩摩太夫 大阪の商賈にして、虎屋次良右衛門と云ふ。當初角澤檢

傳 秘 瑠 璃 海

淨瑠璃秘傳

二十一

- 校に淨瑠璃を習ひ又自分種々の節を發明して一流を極む、后ち豐太閣の命により浪人演劇座の櫓目附となり、其後江戸に下り非常に音曲を流行せしめ、老年に薙髮して淨雲と号し、段淨瑠璃を語り初むと云ふ、世に六薩、廣小薩と云へる節は此薩、廣太夫が遺流なり
- 紀の海音 本姓は榎並貞峨と号す、又契周鳥觀齋等の別号あり、喜右衛門と稱し、後善八と曰ふ、初め僧となり、高節と稱ふ、後醫となり、又契沖の門に入つて和歌を學ぶ、元文元年法橋に叙せらる、著作實に名趣あり、寛保二年十月四日歿す、年八十
- 江戸半太夫 薩、廣太夫の門下にして至極の名人なり、目下の半太夫節即ち之れに始まると云ふ
- 江戸外記太夫 近江太夫の門弟、又外記節の元祖也
- 說經墓八太夫 說經節の元祖にて、歌念佛は是人が權輿なり
- 說教林清 林清節の開祖なりと云ふ

淨瑠璃秘傳

淨瑠璃秘傳

- 山本角太夫 正保の頃、京都の住人なり、土佐の椽を受領し、角太夫節を傳ふ
- 岡本文彌 是は隣れにもやさしき文彌節の鼻祖にて、一方の名人なり
- 井上市郎兵衛 ハリマ節の元祖にして、此人初謠に妙曲の名を得しより、淨瑠璃を學び、遂に一機軸を出す故に、大阪の開発元祖と稱すに至る、寛文年代井上播、廣の椽を受領し、藤原要榮と改名すと云ふ
- 清水理兵衛 性風流にして、常に清風蘿月を弄し、安井天神之側隅に住み、天王寺村徳屋理兵衛と稱す、即ち竹本義太夫の師にして、殊に今播、廣と稱する程、淨瑠璃に堪能にて、延寶年中芝居へも出勤せしと云ふ
- 道具屋吉左衛門 道具屋節を語傳へし、ひ程の名人也
- 豐竹若太夫 五良兵衛義太夫の門人にて、竹本采女と云ふ、元祿十五年道頓堀に於て常芝居興行を始む、此人非常の美聲にて、殊に謠に名人の名あり、麗はしき微妙の聲音、聞く者感ぜざるなく、實に往昔より若太夫

淨瑠璃秘傳

二十三

程マカンの音の勝れたるは稀なりしと云ふ享保三戌年一月豊竹上野の少様を受領し重勝と改名す全十六年亥十月大内に召れ孫庇しの許にて淨るりを叔聞に備ふ帝御感ましまし越前少様を許され尙給旨の奥に塵梁軒と御書添を賜はり前代未聞の面目をはとこしければ此鳥帽子装束を白木の台に載せ受領祝儀淨瑠璃を自分芝居にて興行すワキ豊竹和泉太夫三味線竹澤藤四郎勤ひと云ふ明和元年申九月十三日八十四才にて寂と法名を一音院眞覺隆信日重居士と号す天王寺西門の傍らに古墳あり

第三章 淨瑠璃の小沿革及階級稽古法の事

初も今を去る五六十年前は當今の如く誰も彼も且那も番頭も猫も釋子

も淨瑠璃を語る杯の事はあらず僅かに五六人此廣き大阪に素人淨瑠璃ありし迄とや左れば實に稽古するは商賈人即ち太夫の候補者か三味線彈きのみ何とて此六つヶ敷き物を忙しき商賈の合に志を寄せらるべき然しながら當今上達せし人々は兎も角習掛けの語り人は昔の如く非常に嚴重の稽古はせられざるべし尤も商賈の合に銳氣を養はん速保養がてらの藥風呂ならで保養がてらの藥稽古なれば世の開進に伴ひ益々盛大とありしや疑なし左れば社の一町内に京も大阪も東京も稽古屋のなき所はなく殊に根本とて我大阪の如きは町内又同士も隣全士もあり少くも一町内に二三軒は鑑にありと覺へたり實に衛生を主とする今日柄なれば鬱氣を發揚して胸膈を開く實に此上の事なし扱も有がたき淨瑠璃かな左りながら皆が皆まで此思はくに依つて稽古すればうまからうが不味からうが聲がよからうが調子が參るまいが我面白の樂遊びなれば鎗を附られうが鐵砲を向けられうが頼んどお構なき筈なれ共す